

50506

教科書文庫

5
810
34-1948
20000 19065

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

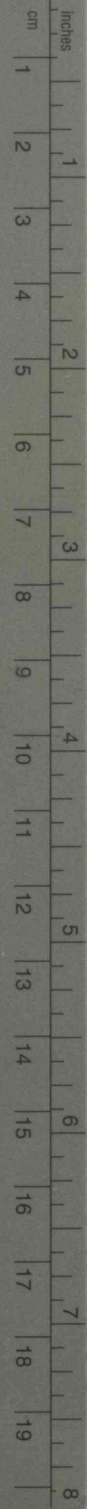


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省著作教科書

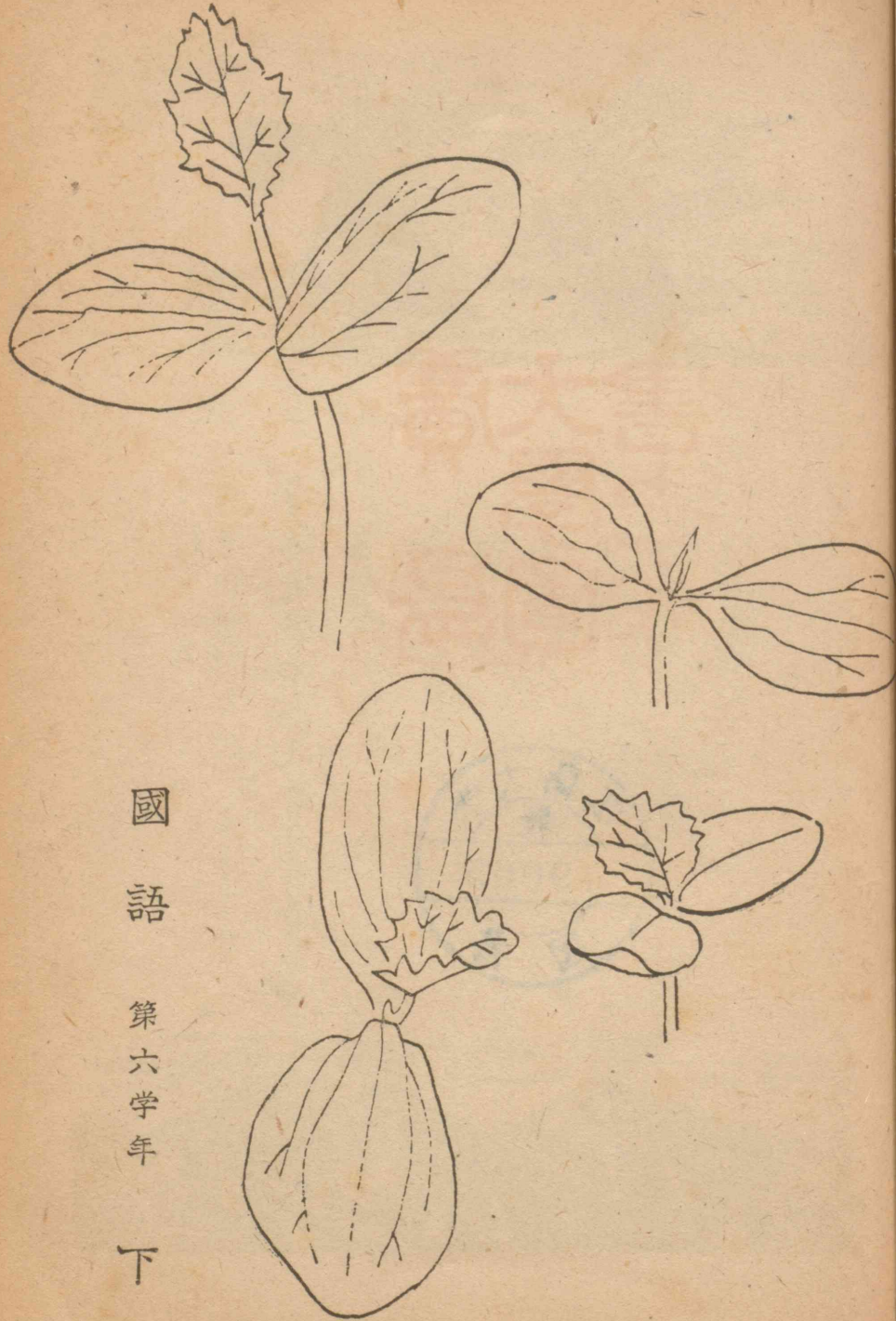
3759  
M014  
資料室

國語

第六学年 下



375.9  
Mo 14

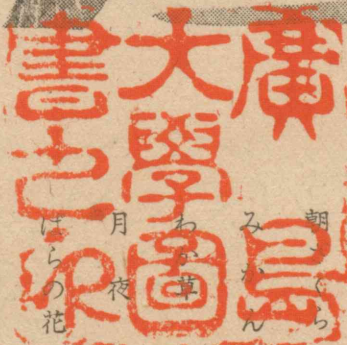


國

語

第六學年

下



もくろく

一 まさに立つべし……………四

矢と歌

まさに立つべし

二 大わしに乗った話……………十九

三 文字の話……………三十四

文字のはじめ

漢字

かな

ローマ字

日本語の書き表わしかた

四 めぐりあい……………四十三

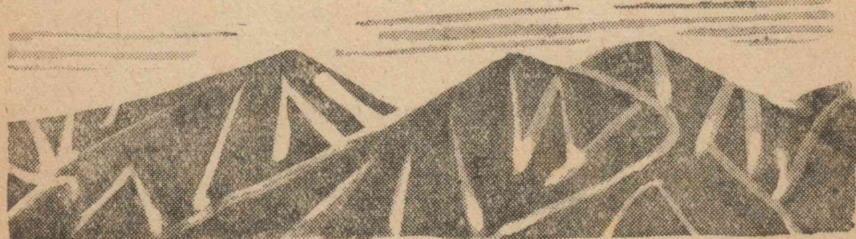
赤絵のはち

熱情のことば

五 その人のことば……………七十七

六 幸福の園……………八十二

七 最後の学級日記……………百二十



一 まさに立つべし



矢と歌

空にはなちし わがそ矢は、  
あわれいずこに 落ちにけん。  
ときいきおいに まなこすら、  
その行く末を 見ざりけり。

空となえし わが歌は、

あわれいずこに 落ちにけん。

いかに目ざとき 人とても、

声の行くえの 見えんやは。

遠くそののち かしの木に、

矢はまだおれて とどまりぬ。

歌のもと末 ふたたびも、

友の心に あらわれぬ。



朝ざくら

だいたいは実をたれ時計はカチカチと

朝ざくらみどり子にいうさようなら

家を出て手をひかれたるまつりかな

六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

冬の水一枝の影もあざむかず

うしはしずかにおのおのの大きな耳をむけぬ

みんてききりの中铁のひびきのかじ屋の火

息白しいつまで残る明星ぞ

さい晩や火のこ豊かの汽車けむり

影絵めく牛馬朝日を織るあきつ



みかん

みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふかく

さくらさくら人が人が子を歩かせて

かわずだまりて人の足大きくすぐる

きみわれ口そそぐ朝のそこの小流れ

水はしずかに流ると見ればもの花

こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る

はまの子ら火をたく青き月夜となり

うまよ人間のかさから耳をだして

まんじゅしゃげおりすててある道のまんじゅしゃげさき続く

子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども

日の第一線が燈台の高きに

れんげつみて子といる母の黒いこうもり

月が出る山の家にうしをつないだ木

わか草

わか

荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さ  
く

いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふ  
く見ゆ

ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ

見ゆ

人の家にさえざるすずめガラス戸の外に来て鳴け病む人の  
ために

わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりてとなりへ  
とびぬ

ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたたみに  
うつりぬ

月 夜

わか

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のどのもを見ればよきつ  
くよなり

ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる  
見ゆ

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ  
ガラス戸の外につくよをながむれどランプの影のうつりて  
見えず

紙をもてランプおおえばガラス戸の外につくよの明らけく  
見ゆ

あさき夜の月影清み森をなすすぎのこぬれの高きひくき見  
ゆ

夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわ  
たる

照る月の位置かわりけん鳥かごの屋根にうつりし影なくな  
りぬ

月照らす上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車ゆきか  
える





ばらの花

大きなるべにばらのひと花思わぬをゆらら  
にあかく開き満ちたる

目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまつかにさい  
てけるかも

風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそ  
う風に

おどろきてわが身も光るばかりなり大きなるばらの花照り  
かえる

ただみればこれかりそめのばらの花おどろきて見ればその  
花動く

ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむき  
ふかむ

大きなるなにごともなきばらの花ふどのはずみにくずれた  
りけり

まさに立つべし

少年たちよ、

野にはたらきて、

土ほこり

顔よごすとも、

わするるな、

明かるくすめる

ながえ顔。

少女たちよ、

花そだてつつ

あきないで、

つづれ着るとも、

失うな、

やさしく清き

なが心。

わが祖國、

やがて立つべし。

きみたちの

そのまともなる

ひとみもて。



少年たちよ、  
うた  
うた



ああ、日本、

まさに立つべし。

きみたちの

そのやわらかき

たなごころもて。



二 大わしに乗った話

ヨーロッパのアルプスの山々のうち、もっとも高い山の一つに、ユングフラウという美しい山があります。スイスの首府のベルンの町からながめると、まっ白に雪をいただく山々がならび立っています。その中で、一だんと高くそびえているのが、このユングフラウの山です。これは、富士山よりはすこし高く、四千百七十メートルばかりの高さがありますが、そのほとんどはただきまで高山植物のさきみだれているけいしや面を、あるいは、氷河が無言の流れをきざんでいる深い深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

その登山電車のとちゆうにはいくつかの停車場があつて、そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

ある夏のことでした。このユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、しばらくとまっています。両親と子どもふたり、ひとりには男の子で八つ、ひとりには女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。それに、この子どもたちをせわする、ひとりの女の家庭教師がついていました。

朝の十時と午後の三時ごろと、日に二どずつ、このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれられて、散歩に出て來るのでした。ニューヨークの大会で育てられた子どもたちには、このヨーロッパの高い山の中の生活は、見るもの聞くものがごとくめずらしく、ゆかいな楽しいものでした。

朝ぎりの中から、白い雲のわきたつように、すべり出るまっ白なひつじのむれ、朝風にひびくすずの音、日光にかがやく高山植物のかおり、その上に、まっ白な服をつけた少女の立っているようなけわしい山が、むらさきがかつた大空の下に、わらうようにそびえているのでした。

ある朝、このアメリカ人の家族は、いつものように散歩に出ました。ふたりの子どもは家庭教師につれられて、めずらしい草花をつみながら、がけの上をそろそろと歩いていました。男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。女の子は、あぶない足どりで、山の上の方に、

また下の方にちらばっているひつじのむれを追いでもするよう  
に、とにかく家庭教師の手からは  
なれて行きそうにしています。  
そのとき、ふいに、みんなの  
頭の上が暗くなって、なんだか  
大きなあらしがふき起ったよう  
な音がしました。

なんてしよう。みんなが、お  
どろいてその音の方へ顔を向け  
て見ると、三メートルもあるよ  
うな羽をひろげた大きな一羽の



やまわしが、サアツという羽音をたてて、空中に風をまき起し  
て、みんなの上へ舞いおりて來ます。「わっ」という声をたてて、  
みんな草の上へひれふすように、思わずたおれてしまいました。  
しばらくして、ふと気がついてみると、いままで先生のそば  
にいた女の子のすがたが見えません。先生が第一にさわぎだす、  
両親があわててあたりをかけまわる。見ると、そのがけの下の  
方へゆったりとんで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、  
女の子はばたばたしているではありませんか。

さあたいへんだ。どうしたらいいか。人々はただ、「あれあれ」  
とさけぶばかりです。と、そのとき、だれか、その大わしのせ  
の上へ、がけの中ほどからとびついたものがあります。だれで  
しょうか。その人は、いっしょうけんめいにわしのせにしがみ

ついで、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。だれでしよう。それは、十五六になるひつじかいの少年です。

このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ています。急に目の前へ、大きなわしがひとりの子をつかんで舞いおりて来ました。いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。そう思うと、勇ましいひつじかいは、身のあぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのです。一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのでした。

さいわいにその勇ましい少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつって、両足で鳥の腹をしめつけ、上体をびったりと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、左手を長くのばして、鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだ



が下へ落ちないように、その上帯をかたくにぎったのでした。そうして、からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、両足でいつそうはげしく鳥の腹をしめつけました。すると、さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなって、羽ば

たきも苦しげに、しだいしだいに、下の方へ落ちるように舞い

おりて行きました。

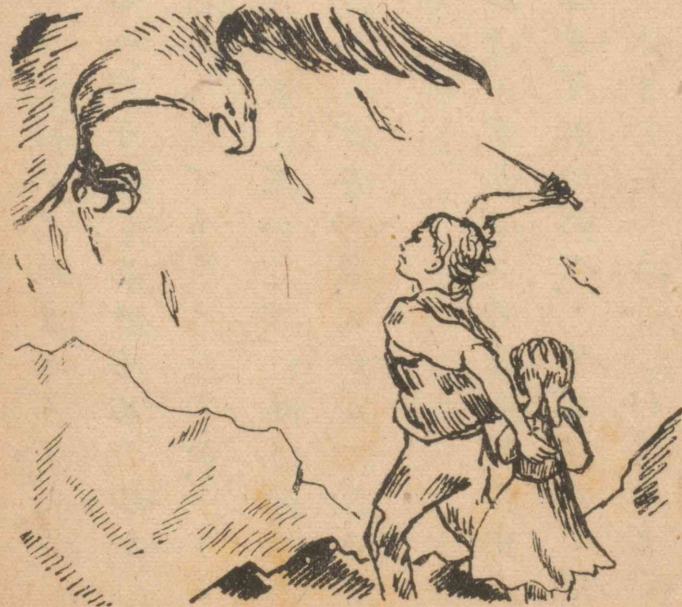
けれど、もしこのわしが、その舞いおりるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、それこそたいへんです。少年はいつ鳥のせからふり落されないものでもない。一こくも早く谷底の地面へおりてしまわなければならぬ。それに、もしまたとちゅうで、このわしが大きなくちばして女の子の頭でもつけば、大けがをするか、殺される心配がある。そんなことのないうちに、どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

ちやうど、発動機にこしようのできた飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、とくに下の方にいる女の子を元氣づけるために「だいじょうぶだ、安心しておいで、私がありますくつてあげるから」といわずにはいられませんでした。

ところが、下につかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、それともおどろいて氣でも失ったのか、すこしもさわがず、あばれもせず、じつとしています。もう呼吸もなくなつたのかと、そのことがまた、少年の氣にかかつてきました。

とにかく、朝の冷たい空氣の中を、アルプスの深い谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へとおりて行きました。もう、がけの上で「あれあれ」といつている人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなつてしまいました。

そのとき、鳥はサアツという羽音をさせたかと思ふと、もう  
たまらなくなつたのか、その重荷をふり落すように、ある岩角  
のすこしあき地のあるところを  
目がけておりて行きました。す  
ると少年は、あぶないことが近  
づいたと感じたので、左手は女  
の子の上帯にかけたままで、右  
手をはなして、手早く、自分の  
こしにさしていた短刀をぬいて、  
鳥がそのあき地へ身をおろすか  
おろさないうちに、鳥のせ骨を  
さけて一つきつき通し、鳥を後へひっくり返すようにするいき  
おいで、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。すると、鳥  
は、不意のしゅうげきにおどろいて、思わず羽ばたきするとと  
もに、つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかか  
りました。いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつ  
た短刀があります。



少年は、必死のかくごで、すばやく女の子を自分のせなかに  
かくしました。

大わしはすぐにとび起きて、きずのいたみもかまわず、おそ  
ろしいいきおいで少年にとびかかって來ました。両方とも必死  
の戦いです。少年は、右手に短刀をふりがざし、左手で女の子  
をかばい、昔の物語に出てくる英ゆうのように、このたけだけ  
しい相手を待ちかまえていました。



大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって来ました。けれども、ひらりと身をかわした少年は、身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。わしは、羽音はげしくすこし舞いたったかと思うと、こんどは両羽をあおりたて、大きな風をまき起すようにして、少年の周囲をおおい包むいきおいでせまって来ました。その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまです。

少年が女の子を後にかばうようにして、すこしあとずさって、岩角へ身をよせかけたとき、ちょうどそこに、手ごろなとがった岩のかけらが目にはいりました。少年は、すばやく短刀を持たちかえた右手で、その石を取るが早いか、目の前二メートルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめぐけて、全身の力をこめて投げつけました。ねらいのはずれようはずはありません。大わしは、この思わぬいたてにおどろいて、ぱっと一まず舞いたちましたが、まだこりないでやって来ました。

それから、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。そのたびごとに、鳥はさげび声をたてて、苦しまぎれに、いつそうするどくとびかかります。羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、ちよつとでも氣をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。その中で、女の子を後にかばいながら、少年は苦し

い戦いを続けていました。

そのとき、がけの中ほどから、ガヤガヤという人声が聞えてきました。少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたちを頼んで、大急ぎでおりて来たのです。ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。けれども、戦っている人と鳥とはむちゆうです。血まなこになって目の前のてきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。ふいに「ドン」という鉄ぼうの音がしたかと思うと、いままでむちゆうになって少年目がけてとびかかっていた大わしは、空をころぶように、くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。少年はほっとして、思わず後へたおれかかりましたが、気がつくともう自分のまわりには、おおぜいのひ



つじかいが集まって来ており、父親のうてにだかれた女の子は、にこにこわらって、この自分のすくい主へ手をさしだしていました。

そのときの少年の喜び、そのときの女の子の両親の喜び、おおぜいの入たちのほめことば、それはいまここでいうまでもありません。目の前の美しい、大きなユングフラウのまっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年をほめたたえているようでした。

三 文字の話

文字のはじめ



私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。けれども、それをその場にはない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。これは、記おくのためにも必要な方法である。

それで大昔には、なわを結んで、その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、色のちがった貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。それから、ぼうきれや、石や、貝がらなどに、はものなどでしるしをつけてしめすことも行われた。

これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

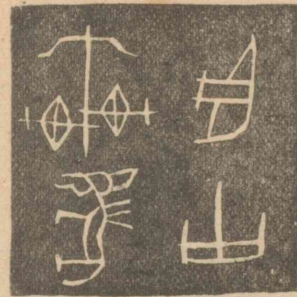
この絵のだんだんりやくされてきたものが、文字というものの起りとなった。

いまから五六千年ぐらいまえに、アフリカのエジプトには、そうした絵文字とよばれるものがあつた。中部アラビアあたりにも、これに似た文字があつた。

漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、これが

だんだん変わって、しだいに形のきまつたものとなり、今日のようにになったといわれている。

### 漢字



漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたもので発達したものであるが、形のなないものは、この方法では表わすことができない。

そこでたとえば、数という形のなないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。また、「うえ」「した」という考えを表わすのには、線を横に引いて、「上」をその線のうえにおいたり、「下」とかいう字の起りである。

木は、もともと形をうつしてできたものであるが、それに線を加えて、「も」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。いまの「本」「末」とかいう字はそれである。

また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。たとえば、「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。

「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、字の右側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

漢字が中国から日本に傳えられたのは、千七百年ほどまえであるが、日本では、「山」を「サン」、「海」を「カイ」というようにもとの中

國の発音にしたがった読みかたをしたが、一方、「山」を「やま」、「海」を「うみ」などとつかって、その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

このように、日本では一つの漢字をふたとおりに読んできたが、中國の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、日本のことばによる読みかたを訓という。

それで、たいいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがった読みかたがある。しかも、字によっては、いくつかの音のあるものがあり、またいくつかの訓のあるものもある。たとえば、「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

かな

美阿止  
都久留  
伊志乃

日本では、中國から傳わった漢字をつかって、いるうちに、その漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、たとえば、「江」から「エ」、「加」から「カ」などと書くようになった。ひらがなはかたかなのように漢字の一部分をとったのではなく、たとえば、「い」は「以」、「は」は「波」、「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたもので作りだしたものである。

かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな発明で、こ

のかなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができるようになった。あの有名な源氏物語や枕草子などは、すべてこのかなによって書かれた作品である。しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

### ローマ字

ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・トルコ・インドネシア・フィリピンなど、世界の大半につかわれている文字である。



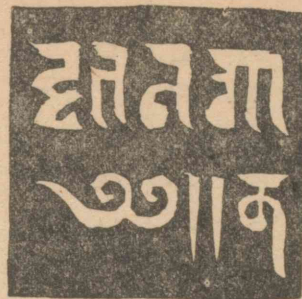
ローマ字は、まえにいったように、その大もとをたずねれば、エジプト文字から出たものである。このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、さらに、そのフェニキア文字がギリシアに傳わってギリシア文字となり、それから、そのギリシア文字がローマに移って、現在のようになつた。ローマ字といわれるのもそのためである。

ローマ字は、全部で二十六字である。この二十六字のローマ字を利用して、発音のちがつている多くの國々のことばが書き表わされている。

日本のことばも、ローマ字で書くことができる。ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、発音のこまかなところまで書き表わすことができ、標準語の教

育に役だつ。また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の入々に親しまれるようになるであろう。

日本語の書き表わしかた



いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種類の文字をわけており、その

うえ、ローマ字の教育にも努力している。

しかし、考えてみると、世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかっている国があるうか。日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであるうか。私たちは、この問題をもっとよく考えてみよう。

#### 四 めぐりあい

赤絵のはち

まぶしい日の光をさけながら、銀座通りをアメリカの一しよ  
うこうが歩いていたら、ふと、ある店先で立ちどまった。ウイ  
ンドにかざられてあるさらやはちを、しげしげとのぞきこみな  
がら、

「美しい赤色だな。あの、ニューヨークのメトロポリタン博物

館の

とつぶやいた。

かれは、かるくドアをおしあけながら、

「あれは今右衛門  
焼じゃありませんか。  
古い焼物  
そっくりですね。  
と、じょうずな日  
本語で話しかけた。  
店の主人はあわて  
て、



「たいへん焼物がおすきのようですが、あなたは——」  
と、あいさつともつかず、返事ともつかない答えかたをした。  
「いや、これは失礼しました。私はハギンスというものですが、  
じつは、私のプリンクリーじいさんがね——」

とあって、すすめられたいすにかけて、楽しそうに語りだした。

話は明治初年のころにさかのぼる。

徳川時代の長いしきたりが、明治になってすっかりようすを  
変えてしまったので、それまでのものの考えかたや商賣では、  
ふだんの生活さえむずかしくなってきた。そこで、日本の手工  
業も、外国から新しい方法を学んで、つきつきと近代的工業の  
道をたどっていくようになった。

ハギンスの祖父にあたるプリンクリーが、日本政府から頼ま  
れて、鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、その  
ころのことであった。

ある日、プリンクリーは、どうやら覚えた日本語で、町をひ



とりで散歩していた。ひくい屋根も、あけはなした店も、のき先にかかっているおもしろいかんばんも、かれには、みなめずらしいものばかりであった。ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。いままで見たこともないみごとな焼物であったからである。

「これは賣りものですか。」

「はい、さようでございます。」

「いくらでしょうか。」

そのねだんのあまりに安いのおどろいた。

「こんなものが、まだほかにもありますか。」

「いいえ、もうこれだけです。」

「どこで作りますか。」

「九州の有田です。ときどき焼いては、この店に持って来ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。」

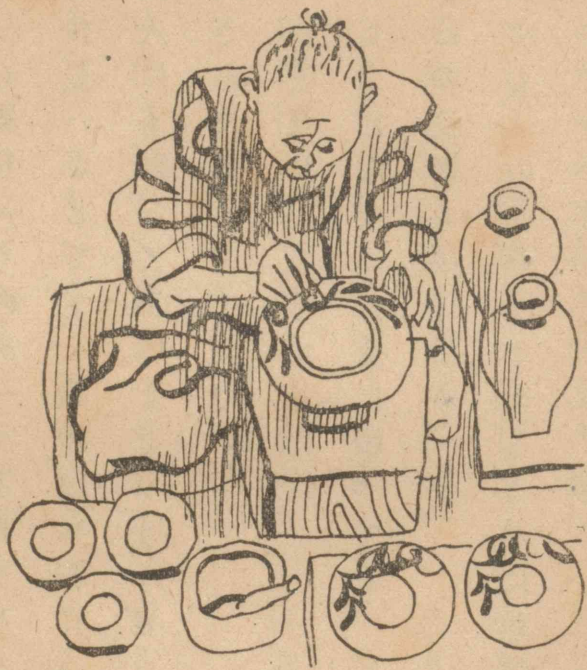
プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさきをうながした。店の主人は、きかれるままに語りだした。

有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。

佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家をつかう食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、そのお庭焼の中でも、「色なべしま」といわれる、色のはいったものが、いちばんすぐれていたという。このお庭焼のために、細工人、画工、ちよ

うごく師、下ばたらきの者などが、三十数人かかえられていた。そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。ところが明治になって、はん主の保護がなくなつたうえに、いままて、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作ることは、むずかしいことであつた。

今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考へ、自分でまず、焼くしごとからはじめた。しかし、そのしごととも簡単にできあがるものではなく、白く焼けるはずのものが黒くなつたり、黄色くなつたりして、失敗に失敗を重ねていつた。職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を



とがあるといふことを聞いて、作品を東京や箱根へ賣りだすことにしたのである。

やりかけたこのしごとはやめなかつた。やがて、思いどおりのものを作ることできる日がきた。しかし、このような美術品を買い求めるようなものは、ほとんどいなかつた。ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うこ

「そうですね。よくわかりました。せっかくうけつけてきたこのしごとは、ぜひ続けてください。この焼物をやめれば、日本から美しいものが一つ消えてしまうことになります。それはおいしいことです。品物は私が買うけましょう。ほかの外国人にも話してあげましょう。どうか、私のことばを今右衛門さんに伝えてください。」

これを耳にした今右衛門は、  
「よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。」

と決心し、いよいよこのしごどに熱情をこめた。

そのときから、ブリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。ジャパンタムスという新聞も発行した。しかしなんといつても、日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工藝史十二巻という大作を著わした。また、名高い大英百科辞典の東洋美術についての説明は、ブリンクリーのふてになったものである。

主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、

「すると、あなたは、そのブリンクリーさんのおまごさんでしたか。じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。」

と、自分のことをうちあげた。祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふたたび

結ばれることになった。

### 熱情のことば

話は、第一次世界大戦がたけなわであったころのことである。そのころ留学生としてアメリカのスタンフォード大学に学んでいた私は、一年半の努力の結果、しゅびよく書きあげた論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。真心こめて教えてくださった世界的魚類学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのていねいなしゅかい状をくださったうえ、いろいろではずをしていただいたから、ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにとおっしゃった。

どちゅう、あるいはミシガン湖のほとりにたたずみ、あるいはナイヤガラたたきをながめ、ボストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、カーネギー博物館のあるピッツバーグに着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。

目ざすりっぱな博物館に自動車を乗りつけ、守衛にみちびかれておくまった館長室の前に立った私は、しばしたためらったのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

「カム イン」

と答える、ひくい、しかも力強い声に、しづかに室内にはいった私の目に映じたのは、広いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、そばにいたるタイピストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであった。

学生時代からそんな敬していたあの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、いまその大先生にお会いすることができた私は、なんとというしあわせ者であろう。博士は、しずかに歩みよる私が手にしているしよいかい状に目をそそいで、

「そのあい色のふうとうには見おぼえがある。わかった、わかった。きみは、かねがねジヨルダン博士からいつてきている日本の学徒、大島おおしまくんでしよう。まあ、かけたまえ。」

と、私が一言も発しないうちに先手をうつて、かたわらにあつたいすをすすめるのであつた。

私がこの博物館をたずねたおもな用事は、世界の学者がだれものぞんでいるカーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらふことで、恩師ジヨルダン博士は、そのためのはずを早くからすすめられていた。あいさつを終つて、用事をきりだすと、話に聞きいつていたホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話、それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。そうしてつぎのように語つた。

「まあ、そのようなありさまで、せつかくのおたずねもむだになるようなわけだが、それはそれとして、きようはきみがまだ生まれなところの日本の話をさせてもらおう。私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、鹿鳴館ろくめいかんというクラブがあり、おかしなもよおしをしていたものだ。そのころ日本をたずねた外人の中で、富士山

や磐梯山のいただきをきわめたのは、アメリカ人が会員であつた私をはじめでたろう。そのときは、まだ三角測量が行われていなかったので、富士山の高さも不明であつた。そこで、山のいただきに立つた私は、小手をかざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、その角度を目算して紙上計算してみたが、その際算出した高さは、実測の結果とわずか十フィートしかちがわなかつた。そんなわけで、私と日本とはふかい関係があるのだが、きょうは、はるばるたずねてみえたあなたへのごちそうに、日本留学生第一号とでもいおうか、私をはじめで会つた日本人について話をしてあげよう。そうそう、指おり数えると数十年の昔になるが、私がまだわかつてアマスト大学の助手をつとめていたころ、寄宿舎で二

間続きの室をつかつていた。ところがある日のこと、せんぱいの教授がやって来て、きみは室を二つももっているようだが、その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、やぶからぼうの話をもちだした。ものずきな私は、それはおもしろいと、教授の申し出でをさつそく承知して、はじめて見る東洋の青年をひきとつたが、室は二つあつても、つくえは一つしかなかつた。そこで、大きなつくえのまん中にチヨークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといつて、たがいに向かいあい、勉学にいそしむことにしたが、その日本の青年はなかなかの人物だつたよ。そのころ、もう熱心なクリスチャンになつていたが、ある日のこと、せい書をギリシア語で読みたいといひだした。それはおやす

いご用だ。そのかわり日本語を教えてくれと、その申し出て  
を承知して、私はすぐに授業にかかった。つまり、私はかれ  
のギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけ  
だが、かれこそ、のちに名をなした新島襄だよ。

自分から話したしたホランド博士は、遠い昔を思い出して、  
ひとりそのときの思い出にふけていられるようすだった。

新島先生年ぶには、慶應三年九月二十一日、マサチエセツ  
ツ州アマスト大学に入学、北側の第八号室に入る。室友ホラン  
ド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、化学、生理、植  
物、鉱物、地質等をこのんで勉学す。とある——新島襄とい  
名を耳にした私は、とびあがらんばかりにおどろいた。こうし  
てなお語り続けようとする博士をさえぎって、

「新島のおじさんなら、私はよく知っています。私は小さいと  
き、その新島襄にたいそうかわいがられたのですから。」  
と、ありし昔を語ろうとした。すると博士は、

「いやいや、時代がちがう。きみたちが知っているはずがない。  
と、一言のもとにしりぞけようとした。が、ことばみじかにそ  
の関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、  
つと立ちあがって、

「おや、これはまた意外だ。じつにめずらしい日本人が舞いこ  
んで来たものだ。それなら襄の写真やら、当時の日記やら、  
きみに見せなければならぬものがたくさんある。きょうは、  
もうこれでしごとはやめた。さあ、うちへ行こう。」  
と、あつけにとられているタイピストをしり目に、げんかんに

出て、横づけにしてあったりっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、一路自たくへと車を走らせた。

同志社をわが子のように、だいに胸にだいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、やまいを札幌のこう外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。当時、母校札幌農学校の教師をしながら、恩師クラーク博士の精神のやどっている札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、両者のつきあいはかなりひんぱんであった。ふつう「満ぼう」でとおっていた私は、そのときちようど四つのいたざらざかりであった。ことに、長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとつては、天下におそるべきなものもなく、わ

がままいっぱいにふるまっていた。

新島のおじさんとおばさんは、「満ぼう、満ぼう」といって私をかわいがった。京都に帰ってから父に送った手紙のどれにも、「ちかごろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話いたしおります」と、必ず書きそえてあったのを見ても、その愛されかたがわかる。そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかつた私は、札幌の創成川の岸にあった家につれられて行つても、思うぞんぶんふるまった。

ある日のこと、おじさんとおばさんが外出の用意をととのえて、

「満ぼう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。」



と、私をうながした。いそいそとげんかんへ出かけて、ふみ石の上にとろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、たちまちふくれあがってだだをこねだした。

「おじさんたちと行くのがいやなのか。なに、そうじゃない。ではどうしたのだ。なにが気にさわったのかなあ。やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだしたよ、よわったなあ。」  
と、おじさんはおばさんに助け船を求められた。

「満ぼう、なにが気にさわったの、おばさんについてごらん。小さな声でうったえる私のくりごを耳にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

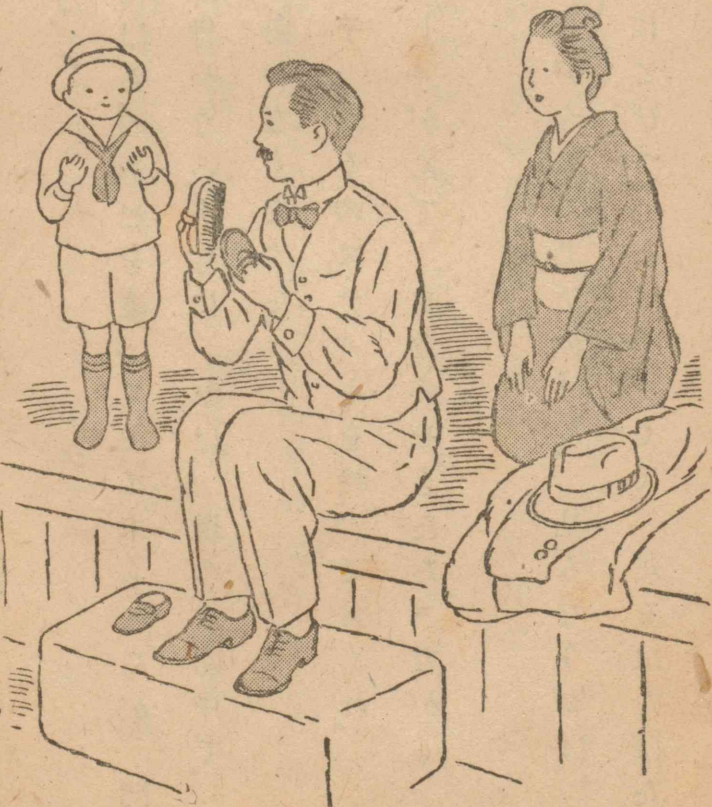
「おじさんのくつは光っているのに、ぼうやのくつはほこりだらけだから、行くのはいやだ」といっているのですよ。なんと

かしなければ、おみこしはあがりませんよ。」

「ああそうか。よしよし。」

おじさんは、きちんと着ていた上着をかなぐりすてて、かた手に小さなくつを持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、カのかきりみがきをかけた。

「満ぼう、これでどうだ。おじさんのようにきれいになったろう。さあ、行こうぜ。」



だされたくつを見て、にこにこことわらった私は、それを足先につっかけるなり、すぐ、小鳥のようにとびだした。

「かわいいぼうやだな。」

おじさんとおばさんはそのあとを追って出て来られたが、門を出て十メートルとは行かないうちに、私は、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなった。

「よわったなあ。やえ子、ぼくのステッキを持っておくれ。」

おじさんは道ばたにしゃがんで、自分のせをたたきながら、

「満ぼう、これか。」

と、にこやかにわらいながら私によびかけた。見るなり私は、おじさんの廣いせなかにとびついた。そうして、足をばたばたさせながら、

「おじさん、早く歩いてよ。」

と命令した。

暑さのきびしい夏の日、私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、日がさをさしかけながらついていらっしやった新島のおばさんとの思い出は、いまでも私の胸にやきついている。

秋たけてりんごのみるころ、おじさんとおばさんは京都へひきあげられたが、その道すがら、小樽おほぞで目についたといつて、車のついたみごとなおもちやを私に送ってくださった。喜んだ私は、朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。そこで、たまりかねた家の書生が、これから車のついたものは送ってくださるなど、くじよ

うの手紙を京都へ送ったりした。その次には、りっぱなむしゃ人形にそえて、ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ぼうへと名ざして送ってくださった。

それからいく年たっても、せつがくるごとにその人形をかざって、ありし日をしのぶことをわすれなかつた満ぼうの心から、どうして新島のおじさんのすがたが消えうせよう。

なくなつた新島のおじさんがいい残された願ひによつて、私の父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、京都にすまいを移すことになつた。十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移つた。そのころは、新島のおばさんは廣島ひろしまにおられて、学校のいきかえりにその門前を通つても、新島家の窓は、かたくとざされてあつた。そのうちにクリスマスの日がめぐつてきた。新島家のとなりにあつた教会の日曜学校の生徒であつた私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、私がだんをおりるのを待ちかまえていた老婦人が、

「おお、満ぼう。」

とさけんで、しつかと私をだきしめた。ああ、なつかしい新島のおばさんだつた。そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようななみだが流れ出た。

そのことのある日、私は、ひさしぶりで窓のあけはなされた新島家をおとずれた。おどる胸をおさえながらたどりついたげんかんには、おもむきのあるかねがつるしてあつて、

これでたただけというように、しゅもくがそえてあった。

「新島のおばさん。」

とよんだつもりで、私はかねをカーンとたたいた。音もなくドアがあいて、半身をだした老婦人が、

「満ぼうが来た。みんな早く出ておいて、満ぼうが来たよ。」

と、家の人によびかけながら、おもわずとびこんだ私をだきしめた。

なつかしい新島のおばさん、おばさんは目になみだをためながら、しゃにむに私をおく深くひき入れた。そうして、

「おじさんが生きていたら、どんなにか喜ぶだろうに——」  
といいながら、主なき書さいへ私をみちびいた。

「ここがおじさんのおへやですよ。あれをごらん。」

と指さされるままに、顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。きずのあるみけんの下にかがやく目は、思いなしかやわらいて見え、その口もとがほころんで声さわやかに「満ぼう」とよびかけそうであった。

「つくえの上をごらん。」

おばさんのことばに目をうつすと、おじさんが日夜ふてをとつていられたという大きなつくえの上に、くつをみがかせた満ぼう時代の私の写真がかざられてあるではないか。

ああ、新島のおじさんは、私を京都までもつれて来て、朝夕かわいがってくださったのだ。手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。いまその写真の主が、こうしておじさんを見あげているのに、おじさんの声は聞えない。

のだ。暗い心になって、じっとおじさんの写真に見入りながら、私は無言で頭をびよこんどさげた。

せきあえぬなみだに目をくもらせたおばさんが、

「そのいすにこしかけてごらん。」

とおっしゃった。

「そこに赤インキがおいてあるでしょう。おじさん

は、年とられてから目がわるくなつてね、手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようになつたので



すよ。そのペンをにぎつてごらん。おじさんのつかいなれたペンですよ。ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、ペンをにぎっている。このすがたをおじさんがごらんになつたら——」

「いっしょにお寺へ行つて来ましよう。そうしておじさんを喜ばせましようね。」

とおっしゃった。

人力車に乗つたおばさんは、昔のように私をひぎにのせた。

町の東にある寺の一角に、こけむす一つのおはか、その前に立つたおばさんは、

「満ぼうがまいりましたよ。」

「いって、私をひきよせた。」

勝海舟の筆になる「新島襄之墓」という五つの文字をきざんだ  
そのおくつき。はか石に水をそそぎながら、

「満ぼうですよ。」

と、おばさんはふたたび呼びかけた。

私は、

「おじさん。」

と呼びかけようとしたが、声が出なかった。しずかに頭をさげ  
た。

ピッツバーグの町を走り出た自動車は、やがてこの外のすば  
らしい家のげんかんに横づけになった。ドアをおして、つかつ  
かと中にすすんだホランド博士は、客間に私をみちびき、自分

は書さいにはいって、しきりにさがしものをしておられたが、  
やがてすがたをあらわした博士の手には、古ぼけたアマスト時  
代のもの、京都時代のもの、なつかしい数々の写真があった。  
ふかい思い出にうたれてゐる私の目の前で、博士は、

「それ、このとおりだ。」

と、日記をくりひろげ、つくえに白線をひいて「國境をつ  
くったあたりを、声高らかに読みあげられた。

ちやうどそのころは眞夏であったので、博士の家族たちは暑  
さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。やがてお晝  
どきになったので、廣い食堂にみちびかれ、博士とたったふた  
り、しずかに食事をしたが、平和主義の旗がしらとしてその名  
を知られていた老博士は、きょうに乗じて、アメリカの考えか

たについて熱意をこめて語られた。

——親の目から見れば、自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、かわいいことはみな同じであつて、そこになんのけじめもない。兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのこと、それによつて兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣だたせたいのが念願である。神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別などあるべきはずはない。四海の民すべて兄弟姉妹である。それで、世界平和、人間平等という理念が、ここからわいてくるのだ——

——と、テーブルをたたいて立ちあがつた老博士は、フィッシュナイフをにぎつた右手を大きくふりまわし、

「愛はにくしみよりも強い。」

と、力をこめてさげびながら、そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。——ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

日本へ帰つたら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを傳えてくれといいながら、自動車のドアに手をかけた老博士が、さらに、

「先ほどの話は、こころよくひきうけたよ。」

とささやかれた。博士は、そのことばの意味をときかねていた私のようにすを見て、大きな声でわらわれ、こんどははつきりと、

「きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。と聞いたされた。

ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼうを守っていてくださったのだ。

私は、停車場まで送ってくださった博士のこの意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、

「ドウイタシマシテ。」

と、意外なあいさつをされた。そうして、これが新島からならつた日本語の一つだといわれた。

### 五 その入のことは



生きるためにたべよ。たべるために生きるな。

きょうのできごとを、あすまで  
のばすな

神は、みずから助くる者を助く。

— フランクリン —





きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、その発表をためらってはならない。

はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。けれども、きみたちは、ほんなく、みかたができるだろう。ひとりの人間にとって真実であるものは、他人にとっても真実だからである。



入の心をひくために、しかめつつらをしたり、みょうな身ぶりをしてはならない。

すなおなれ。

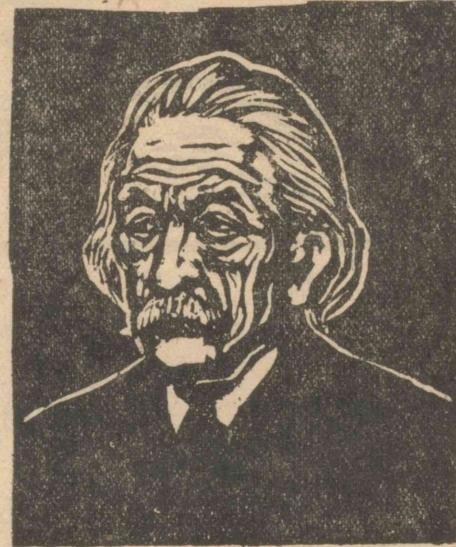
— ロダン —



私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や、森や、山をながめたり、また、そうした風景から自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあついで絵の本が、いつもおかれてあります。

歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、われわれが最



初であります。それ以前は、おたがい他國のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、實際は、たがいにくみあつたり、おそれあつたりしてきました。

友愛の精神が、もつともつとひろがっていきますように。そう思

いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、あなたがたの時代がきたときには、私たちの時代がはずかしく思われるようになることをいのります。

——アインシュタイン——

天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。

——福沢諭吉——

いだいなれよ。

平ぼんなれよ。

平ぼんにしていだいなれよ。

空氣または日光のごとく

平ぼんなれよ。

——内村鑑三——

## 六 幸福の園

雲のまくがあがると、園の前の方に、高い大理石のまるい柱でできた大廣間のよ  
うなものがあらわれます。テーブルのまわりには、この地球の上でいちばんふ  
とっている「幸福」(ぜいたく)たちが、けたものの肉や、ふしぎなくたものを、水  
がめや、ひっくりかえったかなえなどの間で、たべたり、飲んだり、「キヤツキヤツ  
とさわいだり、歌を歌ったり、ぶつかったり、よろけたり、ねむりこけたりして  
います。みんなびっくりするほど、とてもほんとうと思えないほど、ふとって  
て、びろうどや、にしきにくるまり、金だの、眞珠だの、寶石だのを、頭にいっ  
ぱいつけています。

チルチルとミチルと、いぬと、バンド、さどうとは、はじめはいつて来たとき、  
すこしはにかんで、みんな右手の前の方に、光をとりまいてかたまってしまうま  
す。ねこは、ひとことも口をきかず、これも、右手の方のおくへ向かって歩いて  
行って、黒いまくをあげて、すがたをかくしてしまいます。

チルチル 「あんなにうまいものをたくさんたべて、うれしそうに  
しているふとった人たちは、だれだろう。」

光 「あれがこの世の中でいちばんふとただれの目にも見  
える「幸福」どもだよ。どうもあんまりあてにはならな  
いけれど、青い鳥だって、ことによるとちよいとでも、  
この人たちのなかまにまよいこんでいないともかぎら  
ない。だからまだ、ダイヤモンドを、まわしてはいけな  
いよ。ほんの形だけでも、廣間の方をさがしてみよう。」  
チルチル 「私たち、あそこへ行ってもいいの。」

光 「いいとも。あの人たちは下等でもあり、たいていはま  
あ、育ちのわるいものばかりだけれど、人はわるくな

いんだよ。

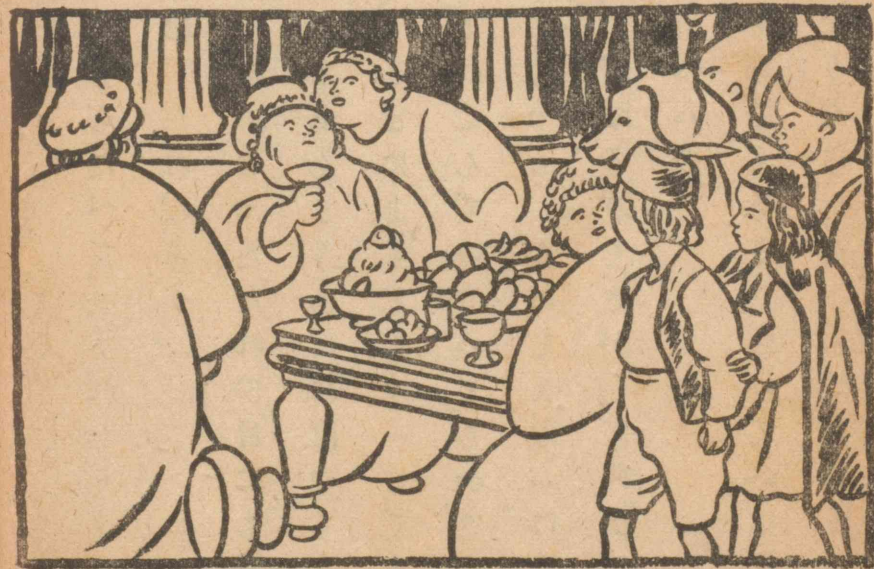
ミチル 「なんてきれいなおかし  
でしよう。」

いぬ 「それに、あんなに肉が  
ある。ちようづめもあ  
る。小ひつじの足に、小

パン 「いかにもうまそうだな  
うしのかんぞうもある。」

あ。うまそうだなあ。  
私よりよっぽど大きい。

さとう 「だが、おまえさんたち  
は、あのさとうがしを



あすれたのじゃないかな。あのとおりテーブルの光栄  
になつてゐるさとうがしを。いってみれば、すばらし  
く美しく、この廣間のなにもものもおさえてゐる。  
いや、どこのなにもものもおさえてゐる。あのさとう  
がしをわすれたのじゃないかね。

チルチル 「あの入たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そ  
うな顔をしてゐるなあ。あれ、『キヤツキヤツ』といつてゐる。わ  
らいこけてゐる。歌を歌つてゐる。なんだか、あの  
人たちが、こつちを見たようだ。」

とうとう「いちばんふとつた幸福」が、テーブルをはなれて、大きなおなかを両手  
にかかえて、たいぎそうに、子どもたちの方へやつて來ました。

光 「こわいことはないよ。あいそのいい人たちだからね。」

きつと、おまえさんたちを、ごちそうによぼうとい  
のだらう。それを受けてはいけない。なにも受けては  
いけないよ。でないと、かんじんな用むきをわすれて  
しまふからね。」

チルチル 「どうして。小さなおかしもいけないの。」

光 「みんな、あぶないよ。おまえの氣持をくじいてしまふ

よ。人というものは、自分のしなればならないつと  
めのためには、なにかしらぎせいにする心がなければ  
ならないものだよ。ていねいに、しかしきっぱりと、  
ことわりなさい。」

「いちばんふとった幸福」チルチルの方へ手をさしたしながら、

幸ふとった 「チルチルさん、ごきげんよう。」

チルチル

びっくりして、「え、あなた、ぼくを知っているの。あなた、  
どなたです。」

幸ふとった  
福

「わたしは、幸福なかまでいちばんふとった『お金持の幸  
福』です。失礼ですが、この中のおもなものをごしよ  
うかいいたしましょう。これが、わたしのむこの『地所持  
の幸福』で、なしのようなおなかをしています。これが  
「みたされたきよえいの幸福」で、このとおり、りっぱな  
ふくれあがった顔をしています。「みたされたきよえいの幸福」  
ゆっくりどうなずく。このなかまは「どのかわいていないと  
きに物を飲む幸福」と、「腹のへらないときに物をたべる  
幸福」で、ふたりはふたごで、ふたりとも、足はうどん  
こです。「ふたり、よろよろしながらおじぎをする。これは『なんに

も知らないという幸福で、みんな魚のようにつんぼだし、「なんにもわからないという幸福」は、こうもりのように目が見えない。このかたがたは、「なんにもしないという幸福」と、必要以上にねむるといふ幸福でね、ふたりとも手はパンのしんだし、目はもものジャムです。さて、いちばんおしまい、ここにいるのは、「ほちきれそうならい」で、口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。

「ほちきれそうならい」が、腹をかかえながらおじぎをする。チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

チルチル 「それから、あの、なかまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。」

ふとった  
幸福

「あの男のことは、きかないほうがよろしい。あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。チルチルの手をにぎりながら、まあ、おいてなさい。みんなえん会のやりなおしをするところですよ。これでけさから十二どめです。わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。あのとおりさわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。わたしは、とてもいちししょうかいしてはもらえない。なにしろ、おびただしい数ですからね。ふたりの子どもに手をだしながらさあ、どうぞ。おふたりのために、ちゃんと席がとってありますよ。」

チルチル 「いいえ、どうもありがとう、ふとった幸福さん。ぼく

は、ほんとうにすみませんが、ちよつとのまも行かれ  
ないのです。ぼくたちは、たいへん急いでいるのです。  
青い鳥をさがしているのです。たぶん、あなたがたも、  
あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでし  
うね。」

幸  
ふとつた  
福

「青い鳥とね。はてな。そうそう、思い出した。だれだ  
か、いつかそんな話をしていたっけ。なんでも、たべ  
てはうまくない鳥だそうじゃないですか。とにかく、  
そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったこ  
とはないようです。というのは、その鳥をあまり上等  
とは思わないからです。だが、まあいいでしょう。もつ  
といいものがありますよ。わたしたちの生活のなかま

にはいつて、わたしたちのすることを、みんな見ると  
いいのですよ。」

チルチル

「なにをするのです。」

幸  
ふとつた  
福

「それは、いつもしごとをしないことです。わたしたち  
は、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、い  
やはや目がまわるようだ。」

チルチル

「それがおもしろいの。」

幸  
ふとつた  
福

「おもしろくないはずはないでしょう。それがこの世の  
すべてですもの。」

光

「あなたはそう思うの。」

幸  
ふとつた  
福

「光を指さしながら、チルチルに向かって、「あの、育ちのわるいわ  
かい女はだれだね。」

こんな話をしている間に、「ふとった幸福」どもは、せつせど、いぬど、さどろど、パンをどきつけて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。チルチルがふと見ると、かれらはみんなどなかよくテーブルについて、飲んだり、たべたり、はねまわったりしていました。

チルチル 「おや、光さん、ごらんよ。みんなは、テーブルにすわりこんでるよ。」

光 「呼び返しなさい。でないと、いまに困ることになるから。」

チルチル 「チロー。こら、チロー。来いというのに聞えないのかい。それからさどろども、パンも、だれが行けといったところでなにをしているんだ。」

パン 「ロにいったばい物を入れながら、「ぎょうぎのいいことばをつかつ

てもらいたいものですね。」

チルチル 「なんだって。なまいきなことをいうな。なにかおまえについているな。それから、チロー、おまえもすぐ来い。」

いぬ 「ぶつぶついいながら、テーブルのすみて、「物をたべているときは、だれにもかまっていられませぬ。なにも聞えませぬよ。」

さどろ 「おじょうずらしく、「ごめんくださいまし。せつかくおまえきをいただきますながら、そうあたふたとおいとますることでもできませんからね。」

ふとった幸福 「ほら見たまえ。さあ、きみを待っているのだ。おことわりはできませんよ。さあ、みんなで、カズくて、いやでも幸福にしてしまおうじゃないか。」

ふとった幸福どもは、喜びの声をあげながら、いやがる子どもたちをひきずって



行こうとする。その間に、「ばちきれそうならいば、光のこしのあたりを、カマかせにおさえました。」

光 「ダイヤモンドをまわしなさい。いまだよ。」

チルチルは、「光のいうように、ダイヤモンドをまわします。舞台は清らかな、こ  
うごうしい、ばら色の美しい光に照らされます。」

チルチル 「ふとった幸福どもがにげて行くのを見ながら、「おやおや、なんてみ  
つともないざまだろ。みんなどこへ行くの。」

光 「みんな不幸のところへにげこんでしまふのさ。」

チルチル 「そこらを見まわして、「やあ、なんてきれいなところだろう。  
どこへ来たのかしら。」

光 「同じところにいるのだよ。ちがったように思うのは目  
のせいです。私たちはやっと、物の眞実を見ることか

できるのだよ。ダイヤモンドの光にたえられる幸福の  
精を見るのだよ。」

「ぼらの目ざめとか、「水のほ  
おえみとか、「あけぼののむ  
らさきとか、「こはくのつゆ」  
などがあらわれます。」

光 「かわいらしい幸  
福たちがやって

来た。私たちをあんないに来た。」

チルチル 「あの子たちを知っているの。」

光 「みんな知っているよ。」

チルチル 「なんてたくさんいるのだろう。」



光

「もっともっと、たくさんいたものだよ。それを、ふとつた幸福」でもが、ひどい目にあわせたのだよ。」

チルチル

「でもいいや。あれだけ残っていればいいや。」

光

「この世の中には、人が思うよりもっとたくさん、幸福はあるのだから。けれども、ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。」

チルチル

「小さな子がやって来た。かけて行って会おうよ。」

光

「むだなことだよ。私たちに用のあるものは、どうせこちを通るのだから。ほかの者にまで会っているひまはないよ。」

小さな幸福のむね、ふざけたり、わらいこけたりしながら、みどりの園のおくからかけたして来て、子どもたちのまわりで、わになっておどります。

チルチル

「まあ、なんてかわいらしいのだ。どこから出て来たのだろう。だれなのだろう。」

光

「あれは、子どもの幸福だよ。」

チルチル

「話をしてもいいの。」

光

「まだだよ。あれは、歌を歌ったり、おどりをおどったり、わらったりするけれど、まだ、お話はできないのだよ。」

チルチル

はわまわりながら、「ごきげんはいかが、ごきげんはいかが。」

まあ、あのふとつた子のわらうことはどうです。なんてかわいらしいほつたをしてるのだろう。なんてかわいらしい服を着ているのだろう。このへんでは、みんなお金持なの。」

光

「なんの、ここだって、どこだって、やはり、お金持よ。」

りびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

チルチル 「どこにびんぼう人がいるの。」

光 「それを見わかることはできないよ。子どもの幸福といふものは、地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見えるものだからね。」

チルチル がまんがてきなくなつて、「ぼく、あの子たちとおどりたいな

あ。」

光 「それは、どうしてもいけませんよ。もう時間がないのだからね。あの子たちが青い鳥を持っていないことは、わかつているのだからねえ。それにあの子たちは、大急ぎに急いでいる。ごらん、もう行ってしまった。やはり時間がおしいのだよ。なにしろ、子どもの時代は、

ごく短いのだからね。」

また、もう一つの「幸福」のむね、まえよりはすこしせの高いのが、廣間の中にかげこんで来て、ありつたけの声をはりあげて、「みんないる、みんないる、こつち見た、こつち見た」と歌い、子どもたちをとりまいて、陽氣なおどりをします。

幸福 「こんにちは、チルチル。」

チルチル 「また、ぼくを知っている子がいる。(光に)ぼくは、どこへ行つても、だんだん人に知られてくるね。(幸福に向か)じきみはだれなの。」

幸福 「きみ、ぼくを知らないの。ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるものですか。」

チルチル すこし困つて、「だって、ほんとうに、ぼく知らない。会つ

たおぼえがないもの。」

幸福 「おい、みんな、聞いたろう。この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。ほかの幸福ども、どつ

どわらくずれる。」だって、チルチルさん。あなたの知っているのは、ぼくたちだけです。ぼくたちは、いつだって、あなたのまわりにいるのですよ。ぼくたちは、



あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、目をさましたり、息をしたりして、くらしているのですもの。」  
チルチル 「おや、そうなの。ぼく、わかった。思い出したよ。でも、きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。」

幸福 「あなたは、やっぱり、なんにも知らないのですね。ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらです。それから、これはみんな、「おうちにいる幸福どもです。」  
チルチル 「ぼくのうちにも幸福がいるの。」

「幸福たちは、みなどつどわらいます。」

幸福 「みんな聞いたかい。この人のうちに幸福がいるかってさ。戸や窓のやぶれるほど、いっぱい幸福でつまっているじゃないの。ぼくたちは、わらったり、歌を歌っ

たり、かべをたたき落し、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。でも、ぼくたちがなにをしても、あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞えないんだなあ。

まず第一に、ぼく自身をしようかいたします。ぼくは、あなたにつかえる「健康の幸福」です。ぼくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。こんどあつたら、わかるでしょう。これは、「清い空気の幸福」で、ほとんどすきとおっています。これは、「両親を愛する幸福」で、ねずみ色の着物を着て、いつでもすこし悲しもうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。これは、「青空の幸福」で、もちろん青い色の着物を

着ていますし、これは、「森の幸福」で、みどりの着物を着ています。外へ出ればいつでも、この「幸福」たちは見られます。また、これは、「ひなたの幸福」で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、これは、「春の幸福」で、きらきら光る青いたまの色をしています。

チルチル

「そうして、みんな、いつでもあんなにきれいなもの。」

幸福

「ええ、ええ、そうですね。それから、夕がたになると、これが「日ぐれの幸福」で、世界じゅうの王さまのすべてよりもりつぱで、おともに「星の出を見ること」の幸福が、むかしの神さまのような、金びかの着物を着てついています。それからお天気が変わると、これが、「雨の幸福」で、真珠をいっぱいつけています。それから、

「冬の日の幸福は、こごえた手のために、きれいなむら  
さき色のマントを開きます。それから、ぼくは、まだ  
なかまのうちでいっとういいのをしようかいしません  
でした。まもなくやって来る明かるい「大きな喜び」の兄  
弟ぶんのようなものですからね。その名はすなわち、  
『むじゃ氣な考えの幸福』です。それは、ぼくたちのなか  
までいっとう快活なのです。それから、これは、いや  
まったくおおぜいすぎますね。もうよしましう。な  
によりも、まず「大きな喜び」を呼びにやりましう。」

ど、見るまに、黒の肉じゆばんを着たわんぱくこぞうのようなのが、聞きとれな  
いさけび声をたてて、なにかにぶつかりながら、チルチルに近づいて來ます。鼻  
を指ではじいたり、ひら手てたいたり、いそがしく足でけつたりして氣ちがい  
のようにはねまわります。

チルチル びっくりしてひどくおこって、「このらんぼうなやつ、いったい  
なんだい。」

幸福 「なにさ、あれは、不幸のほらあなからにげて來た」とて  
もたまらなくなるゆかいですよ。」

せの高い、美しい、天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、  
そろそろとやって來ます。

幸福 「あれは、「大きな喜び」ですよ。」

チルチル 「きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。」

幸福 「もちろん。ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶのですも  
の。まず第一にいわなければならぬのは、「正義であ  
ることの大きな喜び」で、不正がしかえしされたときに、

いつもにつこりしています。でもぼくは、まだわかいから、あの人のわらうのを見たことがあります。その後にいるのは、『善人であることの大きな喜びで、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。あれが『不幸』に行くのをとめることは、なかなかむずかしいのです。なにしろ、『不幸』をなぐさめてやることかすきなのですから。そういうわけで、あれにうっちゃられると、ぼくたちは、『不幸』そのもののように、みじめなものになってしまふのです。右の方には、『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のとなりにあります。その後には、『ものわかる喜び』が立っていますが、あれは、いつでも、兄弟の『なにもものわからない幸福』をさがしているのです。

チルチル

「だって、ぼく、その兄弟にあつたよ。『ふとつた幸福』たちといっしょに、不幸のなかまにはいつてしまった。」

幸福

「そりゃあ、そうでしょう。あれはわるくなつてしまつたのです。わるいなかまとつきあつていたものだから、すっかりくさつてしまつたのですね。でも、それを妹にいつてはいけません。すると、あの女はさがしに行きたがつて、つまり、ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなつてしまふわけですからね。きてここに、『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』があります。それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。」

チルチル 「それから、あちらの遠い遠い金色の雲の中に、つま  
先で立って、やっと見えるくらいのところにいる人、  
だれなの。」

幸福 「あれは、愛することの大きな喜びですよ。まあ、どう  
あなたがやってみたって、あれをすっかり見るには、  
まだ小さすぎますよ。」

チルチル 「それから、あすこに、ずっと後の方に、ベールをかぶっ  
たままで、ちつとも出て来ないのは。」

幸福 「あれは、人がまだ知らずにいる『喜び』たちです。」

チルチル 「ほかの人たちはなにをしようとしているの。なぜ横つ  
ちよを向いたままにしているの。」

幸福 「いま来ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。  
その『喜び』は、たぶんここでいちばん純潔なものでし  
う。」

幸福 「あなた、あの女の人を知らないのですか。まあ、よく  
ごらん下さい。あなたの二つの目をたましいのどん底  
におちつけて、よくごらん下さい。あの人、あなたを  
見ています。そら、手をひろげてこちらへかけてくる。  
あれが、あなたの『おかあさんの喜び』です。くらべるも  
のない『母の愛の喜び』です。」

方々から急いでかけよって来た『喜び』たちは、『母の愛の喜び』を手をたたいてむかえ  
ます。

母の愛「チルチルや、それから、ミチルや。まあおまえたち、  
ここにいたの。思いもかけなかったよ。私、きょう、



ここにいて、それはさびしかったよ。ふたりとも、お  
かあさんにだかれておくれ。なにが幸福とって、こ  
れほどの幸福は、世の中にありませんよ。

チルチル「でも、あなたは、うちのおかあさんにていけるけれど  
も、ずっときれいだもの。」

母の愛「そりやあそうともさ。私は、もう年をとることはない  
のだからね。そのうえ、毎日、新しいカと、わかさと  
幸福とがますのですよ。おまえがにっこりするたびに、  
わかくなるのですよ——うちにいると、それが見えな  
いが、ここでは、なにかも見えるのですからね。」

チルチル「それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえ  
たの。きぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。」

母の愛「いいえ、これは、  
おまえたちのほ  
おずりと、おめ  
めと、だっこと  
で織ったのです  
よ。おまえたち  
がほおずりをす  
るたびに、私の  
着物に、月と日  
の光がさしてき  
てね。」



チルチル

「おもしろいなあ。

ぼく、おかあさんがそんなお金持だ

とは知らなかった。いつもそれをどこにしまつてあるの。それは、おとうさんがかぎをかけたあの戸だなの中にはいつているの。

母の愛

「いいえ、いいえ。私は、いつだつてこの着物を着ているのよ。けれど、人間には見えないのさ。人間というもののは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。母親はだれだつて、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。もう、びんぼうなおかあさんもなければ、きりよりのわるいおかあさんもないし、年をとつたおかあさんもないのさ。おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんですよ。それに、おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の星になつてしまふのですよ。」

チルチル

「ああ、そうだ。ほんとうだ。おかあさんの目の中には、星がいつぱいある。ほんとうにおかあさんの目だ。でも、ずっとときれいだなあ。それから、これもおかあさんの手だ。小さな指をはめている。おまけに、いつかランプをつけるときやけをしたあとまであるよ。でも、ずっと色が白いな。その中から光が流れだすよ。うだよ。ここでは、うちにいるときのように、しごとをしないの。」

母の愛

「いいえ、それは同じことですよ。まあ、おまえ、見たことがなかつたかい。この手でおまえのせわをしてい

るときは、いつだってこんなに白くなって、光がさすのにね。

チルチル

「ふしぎだな、おかあさん。声までそっくりだよ。でも、うちにいるときよりか、ずっとお話がうまいな。」

母の愛

「うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。さあ、これで、おまえたち、私に会ったのだから、あしたまた、あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。」

チルチル

「ぼく、うちへ帰りたくないや。おかあさん、ここにゐるなら、ぼくもここにいたいや。」

母の愛

「でも、それは同じことですよ。私も下へ行くのですよ。小さな家に帰るのですよ。おまえたちがこの上まであ

がって来たのは、これから下へ帰ってから、どういうように私を見なければならぬか、それを、はっきりとさとするためだからね。わかったかね。チルチルや、おまえは、いまだけ天國に來ていると思つてゐるけれど、おまえと私とが、かわいがりあうときは、いつても天國にゐるのですよ。おかあさんに、ふたりはありますせんよ。どんな子だって、おかさんはひとりぎりです。それは、いつだって、同じおかあさんで、いつだって、いちばん美しいおかあさんだからね。おまえたちは、おかあさんをよく覚えて、だいにすることをおわすればなりませんよ。でも、おまえたちは、どうしてここまであがつて來られたの。人間が地上に住

みついてからこのかた、いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかったの。

チルチル

つつましくすこしさがっている光を指さしながら、「あの人がつれて来てくれたの。」

母の愛

「あの人、だれなの。」

チルチル

「光さ。」

母の愛

「私、あの人を見たことがなかったよ。あの方は、おまへたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。でも、なんで、あんなに顔をかくしているの。あの人、顔を見せることはないの。」

チルチル

「いいえ、あの方は、あんまりはつきり顔を見せると、「幸福」たちがこわがるだろうって、心配しているのですよ。」

よ。

母の愛

「あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびていることを、知らないのだろう。(ほかの大きな喜びたちを呼ぶ) みなさん、いらっしやいよ。みんな早くいらっしやいよ。光がどうとう来てくれました。」

物のわかる喜び

「あなたは光なんです。私たちは、ちっとも知りませんでしたよ。あなた、この私がおわかりですか。私は物のわかる喜びでございます。私たちは、それは幸福ですけれど、自分たち以上のものは、見えないのです。私をごぞんじですか。私は、それは長いこと、あなたを求めている正義であることの喜びでございます。」

正義であることの喜び

私たちは、それは幸福なんですけれど、やはり、私た

美しいものを見る喜び

「ちの影以上のものは見えなものです。あなた、私をごぞんじですか。私は、あなたをすいている美しいものを見る喜びでございます。私たちは、幸福なのですけれど、私たちのゆめ以上のものは、見られないのです。」

「さあ、そのベールをおとりください。私たちは、強く、純潔です。」

物のわかる喜び

光

「いよいよベールをかぶって、みなさん、私は神さまのおいつけを守っているのです。ときはまだ来ないのです。でも、いまにきつと来るでしょう。そうしたら、私は、もうなにもおそれず帰って来ます。さようなら。みんな起きあがってお別れしましょう。ほどなくあらわれ

るあすの日を待ちながら。」

母の愛

「光をたきながら、あなたは、私の子どもたちに、それはごしんせつでしたね。」

光

「私は、愛しあう人たちには、いつでもしんせつにいたします。」

「物のわかる喜び」、光の方へ行き、ふたりは長いあいだきあいます。やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

チルチル

「びっくりして、どうしてなっているの。ほかの喜びたちを見ながらおや、みんななっているのだな。」

「でも、どうしてみんな、目にいつばいなみだをためているの。」

光

「まあ、だまっておいでよ、いい子だから。」

七 最後の学級日記

きょうは修業式があった。校長先生のお話を聞いてみると、ずっとまえのことが思い出されてきた。はじめてこの学校の門をくぐったときのこと、はつきりうかんできた。

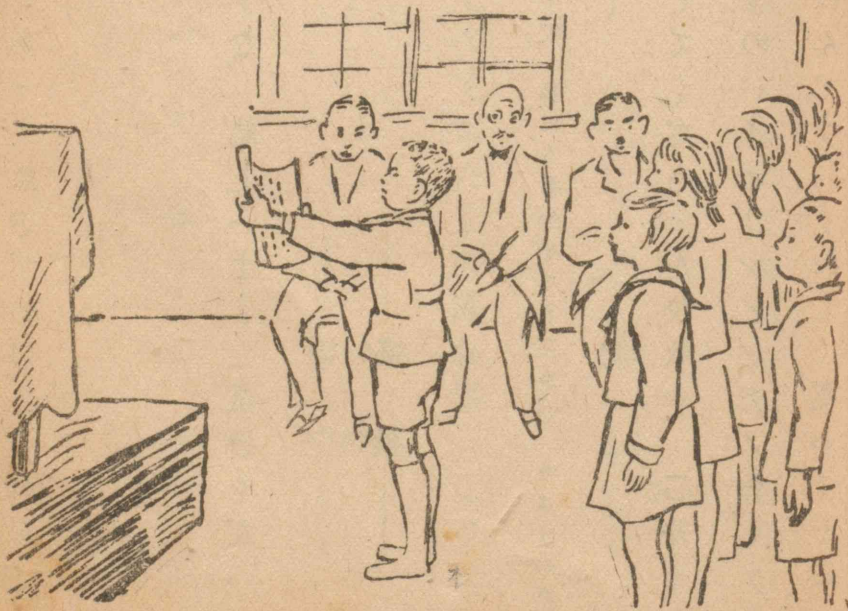
在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。その歌を耳にしながら、もっと下級生をかわいがってあげばよかったなと思った。

「かわいい弟たちよ、妹たちよ。みんな元気で、この学校を愛

してくれ。」

私が答辞を読んだ。けれども、思うことがすこしも書けていないことに気がついた。あれもいいたい、これもいいたいと思った。読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。それはなんともいえない、せつない気持ちであった。

受持の佐藤先生と、教室でお別れをした。先生は、



「おたがいに、信じあえ。愛しあつて生きていけ。これがこの級の最後のことはだ。」とおっしゃった。

うれしいうりな、楽しいうりな、悲しいうりな氣持をだいて、この日記のふてをおこう。

——高橋——

——高橋さんが、きょうの日記当番ですが、私にも書かせてください。きょうの感謝会はわすれることはできません——

先生がたがみんなて、合唱してくださった校歌や、石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏うりな、はじめてのことなので、ほんとうにうれしく思いました。

なぜいままで、もっと先生がたとしたしくしなかつたのだらうと、ざんねんに思いました。先生がたのご幸福をおいのりいたします。

——園山——

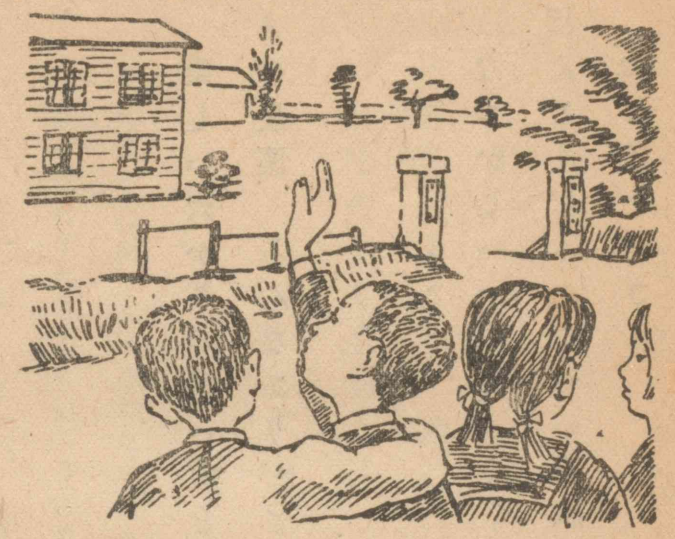
楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、みんなありがとうございます。

——田中——

なつかしい一年生。「こくご」の第一課「みんないいこ」ほんとうにみんないい同級生であった。「心に花をかざれ」。

○でつんだ漢字は、「当用漢字別表」(教育漢字)にはいっていない漢字です。

境 (73)	恩 (55)	燒 (44)	特 (34)	殺 (26)	末 (4)
権 (74)	争 (55)	技 (48)	側 (37)	刀 (28)	残 (7)
栄 (85)	費 (55)	研 (51)	訓 (38)	必 (29)	板 (10)
要 (88)	測 (56)	究 (51)	江 (39)	初 (30)	置 (13)
健 (102)	寄 (56)	諸 (52)	仁 (39)	綿 (30)	府 (19)
康 (102)	宿 (56)	各 (52)	在 (41)	周 (30)	氷 (19)
潔 (109)	授 (57)	衛 (53)	標 (41)	困 (30)	河 (19)
底 (109)	当 (59)	刊 (54)	準 (41)	投 (31)	起 (22)



○  
 新しい旅の門出、  
 希望をもつて。  
 校門のかしの木よ、  
 母校よ、ばんざい。  
 草の野

丸ま山やま



國語 第六学年 下  
Approved by Ministry of Education  
(Date Aug. 23, 1948)

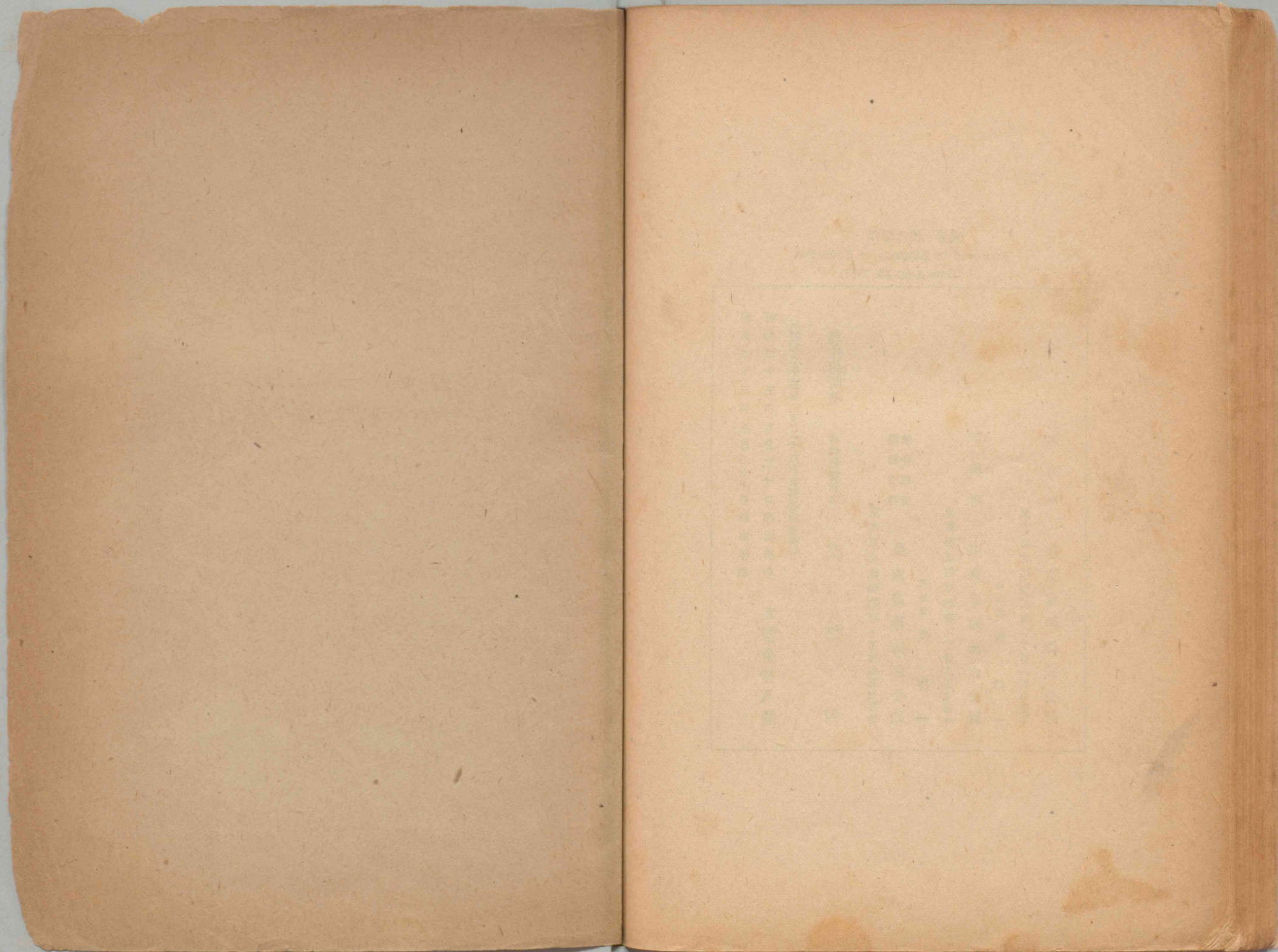
昭和二十三年八月二十三日翻刻印刷  
昭和二十三年九月二十日翻刻發行  
(昭和二十三年八月二十三日文部省検査済)

著作権所有 著作兼発行者 文 部 省

翻刻發行 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社  
代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社  
代表者 長 得 一

發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社



六年  
木原和子